

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、14年間の助成件数は108件になります。これらの活動をより効果的にサポートするために、平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表、参加者が地域づくりなどについて自由な意見交換をして交流を図る場として「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。8回目となる今年度は、平成26年度に助成を受けた団体を対象として、7月3日に札幌市内で開催しました。以下はその概要です。

クローズアップ③

## 第8回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会

# 各地で展開する地域活性化活動をサポート

### 楽しみながら挑戦、越冬野菜づくり

活動名：越冬野菜作りと雪貯蔵体験

～農家の知恵を学んであそぼう！～



畑地 誉 氏  
沼田町特別栽培米生産者の会

お米の生産を中心としたメンバーが集まり、町おこし、地域活性化で消費者との交流会を実践しています。

沼田町は、町ぐるみで雪を利用した活動が非常に盛んな地域で、札幌からの親子農業体験のイベントもあり、それも含めて、雪で野菜を貯蔵

するイベントの企画が持ち上がりました。私たちが一番に注目したのは、キャベツ、ごぼう、ジャガイモ、大根です。この4種類にしぼって野菜を貯蔵し、その野菜を使った豚汁を作って食べてもらう企画にしました。キャベツは、私たちが7月中旬に播種を行い、11月の貯蔵まで育てます。町の中に青果を扱っていて、ゴボウの加工を一年中やっている業者があります。紙袋の中にゴボウを入れて雪の下で越冬させることを何十年もやっている会社で、ゴボウはここから調達することにしました。

11月に雪貯蔵を行いました。すりぬかの中に大根を入れ、キャベツで埋め、一番上にゴボウの紙袋を乗せました。ジャガイモだけは雪の科学館の野菜貯蔵庫に入れてもらいました。ジャガイモの雪貯蔵は保存が一番難しく、失敗するリスクが非常に高いのです。町の施設を巻き込んで貯蔵させてもらいました。貯蔵作業

の日は「収穫感謝祭」の日でもあり、交流事業をしながら、みんなで雪貯蔵を楽しみ勉強会も開きました。

3月に雪からの掘り出しを行いました。雪から掘り出す作業中に中からネズミが出てきて、みんなビックリ。子供たち、特に小学生は、雪の中では野菜も動物も生きていることを実感できたと思います。近くの「ほろしん温泉」の料理長には、越冬で甘みが出ていると褒められました。熟成の意味を子供に伝えるのは難しいのですが、大学生が野菜は自分が凍らないために糖分を出すことを視覚的に説明し、熟成について勉強ができました。

今後の課題は、活動の担い手がなかなか出てこないことです。人材、団体の育成に力を入れようと考えています。フェイスブックを利用して活動内容やイベント情報を発信していきます。

### 八剣山の麓で環境教育活動

活動名：創造型エコツーリズムプログラムによる農業地域の活性化プロジェクト



ピアンカ フュルスト 氏  
NPO法人八剣山エコケータリング

札幌市南区にある八剣山の麓で家族が果樹園を営んでいます。その中で環境教育の活動を始めて約10年経ちました。事業の内容は、環境エネルギーの勉強をしながら、地元の農産物を美味しく食べ、野外授業や遠足を行うものです。

エコエネルギークイズラリーは、参加者が各々果樹園の園内地図を持って歩き、所々に設置してあるソーラーシステムなどのステーションを見つけます。そこにはスタッフが付いていて、一緒に料理体験や水遊びなど、クイズの答えを体感し、知識が身に付く内容となっています。

今回のクイズラリーでは普段なかなかアクセス出来ないツールを置くことができました。

ソーラーボックスは、ソーラーパネル一枚で発電し、中にアイスを入れても溶けないものです。バッテリーはすぐに減りますが、太陽熱が多い日は、アイスは凍ったままです。普段は農産物や飲み物を冷やして使っています。

ソーラークッカーは、太陽熱だけで約300度にもなります。水が30分もすると、お湯になり、ジャガイモやトウキビをゆでたり、採りたて果実をジャムにすることもできます。

ソーラーオーブンは、普通のボックスの上ガラス、中が鏡で、約150度になります。ポルトガル製を輸入しました。太陽の向きに合わせて、熱が発生し、ケーキ、ごはん、またゆで卵を水なしで作ることができます。

ソーラードライヤーは、太陽熱を利用し野菜・果物を乾燥する器械です。利用者はまだ少なく高値ですが、エコにこだわり使っています。

ペレットグリルは、ペレットストーブのバーベキューバージョンです。これらを使用したエコエネルギーラリーは私たちの果樹園活動に合い、体験教育にもつながります。また、この中の一つをピックアップして授業を行うことも可能です。

今まで多くの各教育団体・教育施設（フリースクール、高校、シルバー大学、石狩管内の小学校）の生徒や先生方などに利用してもらいました。また、併せてエネルギーエコラリー、太陽エネルギーを利用した料理教室なども実施しています。

今後は、修学旅行生の受け入れも行っていきたいと思っています。旅行会社とネットワークを結び、定期的に行えば、面白い結果が得られると思います。さらには「チームビルディング」、札幌市と共に一昨年からメニューを開発してきました。エコクラフト・エコエネ

ルギー、また料理などを夏と冬に行い、様々な団体に体験してもらっています。視点を変えながら様々な手が加わることで、楽しいエネルギー教育のメニューがこれからも活かされ続けていくと思います。

## 女性の夢を実現していける街づくり

### 活動名：魚網たおるの製造・販売による地域活性化事業



森崎 三記子 氏  
釧路モカ女性プロジェクト

釧路モカ女性プロジェクトとは「も(M)っと 大(O)きく 格(K)好良く あ(A)りたい」をテーマに活動しています。釧路地域の子育て中の女性や介護を担っている女性、シングルマザーなど様々な立場にある女性の就労意欲の触発と場づくりのため、イベントや研修、商品

の開発、制作、販売をする団体です。釧路地域の活性化を女性の視点で考え、主体性を持ちながら個々の能力を発揮し、女性のやりたいことや夢を実現していける街づくりを考えています。

活動として、魚網製品の販売・作り方講座を行っています。釧路市内の観光客に人気の「和商市場」で、月一回の「和商の日」に、一角を無償で提供してもらい出店しています。市内のイオン、イトーヨーカドーが地場商品にすごく力を入れています。私共にも大きな売り場を作ってもらい、そこでも売っています。東京の釧路出身者の集まりの際にも販売したりしています。

2014年10月に札幌市で「日本女性会議」が開催されました。初の北海道開催で、全国から多くの参加が見込まれ、準備期間から、札幌市と札幌市男女共同参画センターに何度も出店許可をお願いし、販売ブースを獲得できました。メンバーは会場の臨場感を身体で受け止め、とても良い経験でした。予想以上の売上と共にその後の活動へのステップとなりました。

釧路には古くから女子アイスホッケーチーム「釧路ベアーズ」があります。新聞で、スポンサーが離れて活動にお金がかかることを知り、15年1月の全国大会会場で選手に販売協力を依頼し、売上の一部をチームに寄付するイベントを行いました。選手の元気の良さや地域の方々から愛されているのを目の当たりにし、

元気と明るさ、勇気をもらいました。地域とのつながりが本当に大切だと教えられました。

今回実施してきた事業が2月に「北海道男女平等参画チャレンジ賞」を受賞しました。道東では初めての受賞で、釧路では大きく取り上げられました。最近の女性の活躍推進という追い風もあり、地方紙、大手新聞社の全国版に掲載されました。

魚網部の活動は、二人のパートで動かしています。少ないパート代、最低賃金で働いてもらい、その他は私たちが市民活動として動いています。販売店を増やしたことで、みなさんの温かい協力を得ることができ、最近では全国の方にも買ってもらっています。人づくり講座もたくさんやり、外部団体ともつながりました。地方の活性化に力を込めたいという思いを、外部団体とのつながりで達成することができました。

今後とも、「魚網たおる」の製作販売に代表されるような新しい働き方をしながら、女性が自分の住む町で生き生きと自分らしく輝いて暮らしていくことを提案し続けていきます。「人づくり講座」開催や他団体・他事業とつながって地域活性化実現に向けた活動を行っていきます。

## 誰もが暮らしやすく楽しめるまちづくり

### 活動名：「逃げバリ」でおもてなし

今回、「カムイ大雪バリアフリー推進協議会」を立ち上げました。ホテル、飲食店とネットワークでつながり、観光やアクティビティの紹介をしています。障がい者だけでなく健常者も一緒に楽しめるものを作っています。

「旭川冬まつり」会場のバリアフリーマップを作成し、利用者がマップの虫眼鏡マークをクリックすると、その場所が写真で見られます。緊急の場合を大きく表示して、クリックで電話番号等を表示、暖まれる場所の室内状況を細かく情報提供しています。

私を含めて避難について何も考えていない車椅子ユーザー、障がいのユーザーに集まってもらい、話し



五十嵐 真幸 氏  
カムイ大雪バリアフリー推進協議会

合いをしました。車椅子目線から見たバリアを調査確認し、病気だけではなく、災害をどう考えているか話しました。実際に避難区域の公園に行って、「JINRIKI (ジンリキ)」という道具を使ってみました。人力車のように人が入って車椅子を持ち上げ、前輪だけ浮かせて引っ張っていくものです。また、雪道でも進める車椅子の「AQURO (アクロ)」を使って、公園等を歩きました。本当に悪路でも、冬の雪の上でも進むことができます。こういうものがあればどんなイベント会場にも行けます。いざというときには車椅子ユーザーを安全に避難させられます。ただ、問題は重さです。私たちは車椅子を自分で車に積み込みますが、なかなかこれを持った状態で買い物をしたり、イベント会場へ行くことができません。会場でレンタルしていて、怪我人を楽に運べたり、遊びに行ったときに「こういうのがあるよ」と提案してくれると、乗って楽しめるとPRしました。

遊びながら災害について考える、雪で作るバリアフリー公園にも挑戦しました。まずは楽しめるものでなければいけない。障がい者、子供、誰でも遊べる。車椅子でも行けるように踏み固めて、段差なしに楽しめるものを作りました。ここで大事なのが災害はいつ起きるか分からないことです。もし遊んでいる場で災害が起きたらどうするか、「それでは避難します」ではなくて、逃げる場所、すべきこと、介助方法全て含めて一緒に考えました。

逃げバリ (逃げるためのバリアフリー) の情報発信を身近に感じてもらえるように、遊びながら一緒に考えることを想定して、ホテルの方にも関わってもらいました。車椅子のタイプもいろいろで、介助者が怪我をしてしまえば、介助方法が分からない。外国のアスリートは、ホテルにチェックインの際、何かあったときに部屋に入ってもいいという許可証にサインすると聞いたので、ホテルの方に伝えました。

今後は、自分たち自身がまず避難方法を勉強する必要がある。普段から自身がちゃんと考えていれば、パニックになっても人に伝えられる。まずはお互いに知ること、そして理解を深めていくことが大切です。様々な道具があり、様々な状況があり、様々な場所で何が

起こるか分からない。こういう課題については、永遠に考え続けて一緒になって訓練していかなければ、解決ができないことも今回の事業で分かりました。継続してやっていく必要があると思います。

## シーニックバイウェイの地域資源を活用

**活動名：来訪者の回遊性及び活動の認知度向上に資する域内ゲートウェイでのマルシェ他の実施**



伊藤 恭佑 氏  
層雲峡・オホーツクシーニックバイウェイ

層雲峡・オホーツクシーニックバイウェイのルートは、1市7町1村で構成されています。行政の垣根を越えた上川町と連携することによって、年間60万人宿泊のある地域から、オホーツク方面に人を流そうというのが目的です。

地域資源マップとして、春・夏向けに知られていないビューポイントを記載したマップ「花回廊」を1万部作成し、ルート内の道の駅や道央圏の高速道路のパーキングエリア等で配布しました。秋・冬向けには、ルート内の食と春・夏とは別のビューポイントを記載したマップを同様に作成、配布しました。ルートの旗は、交通安全の内容とルート名、シーニックバイウェイのロゴ入りの旗を6本作製して、9～11月にルートのゲートウェイ施設の上川町大雪北の森ガーデンの国道39号沿いに設置しました。

マルシェは、上川町の「食のガーデンin上川」と合同でブースを設置し、実施しました。他のイベントと重なったこともあり、ルート内の9市町村のうち、紋別市、雄武町、滝上町の参加となりました。PRブースではパネルを並べて、お客さまに活動を見てもらい、雄武町は海産物を主に、滝上町は焼鳥、紋別市は名産の蒲鉾<sup>かまぼこ</sup>をその場で揚げて販売し、蒲鉾すくいもやりました。

課題と効果を把握するため、来場者に評価のアンケート調査を行いました。花回廊マップの人気は高かったものの、イベントや市町村観光情報は地図だけではアクセスができず、地図への掲載が必要、地元めしマップは地域性のある掲載メニューの再検討、写真技術の向上が課題でした。マルシェは、出店業者の8

割弱が再参加の意思を持っていました。リピートに関し会場が上川町であり、「新鮮な魚介が食べられる」が約6割、「沿岸部の新鮮な食品が紅葉の見学場所から比較的近いところで食べられる」ことを理由としている人が多い。ルート内他の地域へは、回答者の6割弱が来訪を望んでいました。紅葉目的の観光客が多いため、次年度の花回廊めぐりが最も多く、マルシェの購買客は食を評価しての来訪動機となっています。行きたくない理由としては、遠いためが多い。ルート内3店舗の業者の売上状況と再参加の意思については、どの業者もほぼ完売で、次回への参加意思がありました。こういった結果を伝えることによって、他の地域でも出店が増加していければと思っています。

課題は、今回の売り上げ情報をルート内で共有して、さらなる出店者の増加を促すことです。出店している団体が3つあるので、他地域の特産物の委託販売を検討しました。海産物が人気なので、ルート内の海産物取扱店に広くPRし、出店を募ります。花回廊マップにはアクセス情報を掲載するか、他の情報への差し替えを検討します。地元めしマップは、地域性のある掲載メニューの再検討、食べたくなるような美味しい食材と写真技術の向上を図っていきたいと思います。来る価値があると思わせる魅力的な資源の再発掘、PRの手法の検討をしていきたいと思っています。今年はHPを作成して、マップ情報やルートの構成員の投稿情報を掲載していく予定です。

## サイクリストにやさしい恵庭を目指して

**活動名：風を感じ、ふと止まり、巡りながら地域の魅力発見！**

札幌市豊平川河川敷から恵庭駅まで、札幌恵庭自転車道線の整備の予定があります。平成22年に一般公募者を含む恵庭工区延伸ルート検討委員会ができ、その提言を受けて、「えにわ自転車散歩実行委員会」が結成され、「恵庭自転車散歩」を実施しています。恵庭の街は良い街だと感じてもらうために、テーマを「情報発信の充実」と「サイクリストのサポート」の大きく二つに分けて



泉谷 清 氏  
えにわシーニックプロジェクト

事業をスタートしました。

情報発信の充実では、えにわ自転車・マップを作成しました。作成にあたり、モデルルートの選定、走行環境の改善、車道の広さ、線の引いてある道路の把握、立ち寄り場所、見どころ、地域資源の発見をするため現地調査を始めました。みんなでアイデアを出し合い、実行委員会、ワークショップで検討しました。恵庭の街を自転車で安全に楽しむには、マップに何が必要かを検討し、おすすめの立ち寄り場所、工具と救急箱のある場所も載せることにしました。

今回のマップは、初心者用、自転車人口の拡大のために作成することにしました。コアメンバーでアイデアの整理をして、専門のデザイナーに入ってもらい、掲載項目を、ルールやマナー、3つのモデルコース、食べ物、もしものときはどうするか、自転車修理・販売店としました。実際に現地を試走し、その結果をマップにしました。プリントアウトができないですが、これを見て恵庭に来ると、良いところは全部見られます。

情報発信は、フェイスブック等のSNSを利用しています。自転車にとって恵庭の魅力は平坦な道路です。恵庭の街には、非日常を求めて人が来るんだろうと思います。交流人口が多くなって「恵庭って良いところだね」と、若い人が少しずつ増えています。もう一つやりたいのは、まちの語り部養成です。恵庭の街の良さをきちんとつかみ、話せる人が欲しいと思います。

サイクリストへのサポートでは、休憩所を設置しました。安心して立ち寄れ、案内ができ、休憩できる場所を地域ぐるみで選定しました。ここに空気入れ、工具、救急箱も置き、トイレに行きたい、何か食べたい、案内をしてくれたら有難い、というサイクリストをサポートをしたいと思います。今、自転車のマナーが社会問題にもなっています。子供や初心者を対象に、安全で安心なサイクリングをモットーにマナー研修を行いました。

今回の事業を実施した結果、サイクリングが「まちづくりと健康増進」、さらに交流人口を増加させる地域活性化の役割を果たすようになってきました。今後の課題は、企業と協働で「サイクリング観光事業」の事業化を模索していくことです。

## 創造（想像）の羽を伸ばし、地域資源を磨き上げる

### 活動名：空知の「空」から夢の実現をデザインする

滝川市出身のアートデザイナー五十嵐威暢さんが地元の豊かな自然、歴史文化をいかして、デザインやアートの力で魅力ある街をつくりたいと、2002年に五十嵐デザインアート塾を形成し、それに続いて、主旨に賛同した地元の人、関係者が集まり、実行部隊としてNPO法人アートチャレンジを立ち上げました。



清水 拓智 氏  
NPO法人アートチャレンジ滝川

滝川市は20年にわたりグライダーで街づくりを行っています。空知地域の空は、北海道の中でも非常に自由な空で、スカイスポーツに向けた空域です。アート・デザイン、空知の地域資源の「空」、そして「メーヴェ<sup>※1</sup>」を作るオープンスカイプロジェクト、これをミックスして空知の「空」を発信したいと事業を実施しました。一般の人がアクセスしやすい滝川のスカイパークで1930年の機体と2010年の機体、2機のカモメ型ガルウィングの木製の機体を実際に並べて展示し、広く紹介して、滝川への人の流れをつくるのがテーマです。

アートチャレンジの事業である「太郎吉蔵デザイン会議」には全国からアーティストに集ってもらい、いろいろな議論を聴衆に聞いてもらいました。会議の中で機体の紹介、講演会を実施したほか、滝川市航空動態博物館（たきかわスカイミュージアム）で「メーヴェ」と「ミニモア<sup>※2</sup>」の2機を展示しました。

夏のイベントで公開テスト飛行を企画しましたが、記録的な豪雨で中止になりました。しかし、雨の中、話を聞き付けた1,000人以上の人が訪れて、機体の紹介、トークショーを実施できました。展示第二弾は、新十津川町の廃校をアトリエに活用したアート施設「かぜのび」での「メーヴェ」と「ミニモア」の2機の展示です。また、一般市民向けホールでは、製作秘話を含めた講演会のほか、機体を持ち込み、実機の説明会を実施しました。事業の合間に、メーヴェのテスト飛行を繰り返し、飛行機として完成できました。7～10月に場所をかえて、公開フライト、展示、講演会の3本立てで活動しました。

※1 メーヴェ

「風の谷のナウシカ」に登場する飛行具を具現化した超軽量小型飛行機。

※2 ミニモア

1935年初飛行。当時の最高性能機で多くの世界記録を樹立。現存する飛行可能な機体は4機しかないといわれる、その1機をたきかわスカイパークが保管。

今回強く感じたのは広報のネットワークの強さです。飛行機は、マイナーで万人受けしないところがあります。新聞等からヤフーニュースに流れ、ヤフーのトップ記事に掲載されて、ツイッターでたくさんツイートがあると、テレビで紹介される。これまでにないサイクルで、いろいろな方にこの事業を知ってもらえました。どうソーシャルネットの興味を引くのが、地域資源を外に出す際の今後のポイントになると感じました。

## 建築の設計コンペで函館を創生

### 活動名：「ハコダテ☆ものづくりフォーラム」設計競技2014

「ハコダテ☆ものづくりフォーラム」は、2010年に市民によって結成された任意団体です。北海道建築士会函館支部に所属する正会員6名が構成メンバーで、現在のスタッフは7名です。

私達の活動の主旨は、都市の抱えるいろいろな問題を解決するため、建築設計競技というイベントを企画し、広く全国に募集したアイデアを、その問題解決に向けた提案として地域に還元するものです。これまで2回、建築の設計コンペを開催いたしました。

今回の事業は、第3回目の建築設計コンペで、主題は「Centennial Inquiry」（「100年を超えた問いかけ」）です。函館の西部地区には「旧ロシア領事館」という函館市の条例により景観形成指定建築物に指定された築107年の建物があります。18年間全く放置された状態にあるため、老朽化が進んでおります。後世にこの歴史的建築遺産を残していくことがこの競技のテーマです。設計競技は「国際オープンコンペ」とし、誰でもが応募できることとしました。

審査員は6名です。公開審査の場で、応募者が各々の提案をプレゼンテーションし、その場で優秀案を決定いたします。14年4月7日に応募要項を全世界に発信いたしました。同20日に旧ロシア領事館を一般公開し、27日には、コンペに参加する方たちを対象に現地見学会を行いました。7月11日に応募作品の受付を終



石王 紀仁 氏  
ハコダテ☆ものづくりフォーラム

了。14日から非公開での一次審査を行い、公開審査に臨める作品を数点選びました。8月23日、一次審査を通過した応募者に来函していただき最終審査会を行い、その場で各賞受賞案を発表しました。翌日から応募作品の全てを展示する巡回展示会を、市内で3回にわたり開始いたしました。

コンペの結果は提言書としてまとめ、函館市長に報告いたしました。今年3月には成果品としての作品集ができあがり、参加者、関係者に配布し、この事業を終了しました。約100ページの記録集には全作品とコンペの経過、作品への講評を掲載いたしました。

設計競技の成果としては、まず1つ目に、旧ロシア領事館の価値の敷衍の達成が挙げられます。この目的に対して、100口を超える市民からの協賛金を集めることができ、一般公開、公開審査会、巡回展示会を合わせて、延べ500人の市民の方たちに来場していただきました。これにより、市民による保存への意識を引き出すことができたと考えています。

2つ目は、事業の終了後、旧ロシア領事館の再生を目的に、函館市が実際に建物を利活用するための事業者選定プロポーザルを本格的に開始したことです。私たちの企画した競技の活動が行政を動かすきっかけになったと自負しています。最大の成果は、旧ロシア領事館の将来に向けた存続について、この6月に文化庁の技官が来函、床下から天井裏までの綿密な調査をし、「地方の文化財保護条例に申請をすれば、問題なく有形文化財の登録は可能であろう。ただそれだけではなく、もう一つその上を目指してはどうですか」とのお話がありました。こうして、国による「旧ロシア領事館」保存への大きな意向も引き出すことができたのではないかと考えています。

現在、4回目の設計競技の準備を始めています。伐採時期を迎えた道南の針葉樹の普及をテーマに競技を開催いたします。函館には美しい街並、美味しい食べ物が沢山ありますが、そこにプラスアルファとして芸術（ものづくり）の街という新しい横顔を加えることを目標として活動を続け、函館がますます魅力ある街へと成長していくことに尽力してまいります。